生涯学習情報紙
ら・ら・ら
Life Long Learning

第21号
発行日 平成13年11月27日
発行者 江別市生涯学習推進協議会
編集 広報小委員会
連絡先 江別市教育委員会生涯学習課
〈高砂町24・381－1062〉

動き出した「総合学習」

―学社連携と協議会の役割―

●「総合的な学習の時間」

14年度から小中学校で本格的にスタートする「総合的な学習の時間」(以下「総合学習」)は、学歴社会が生み出した知識偏重の詰め込み教育への反省から、子ども達に「生きる力＝自ら課題を見つけ、考え、答えを探す力」をもっと身につけさせようというもので、現在はその移行期間にあたります。元々この「生きる力」は家庭や地域で身につけてきたものですから、こうした状況になってきたのは、学校教育のあり方だけに問題があったのではなく、むしろ家庭や地域の教育力の低下にその原因があると思われます。「総合学習」は学校を含めた地域全体で子育てする社会を再生する取り組みなのです。

土器づくり体験（角山小）

●江別市では…

江別の学校でもいろいろとユニークな学習が行われています。よく耳にするは野幌原始林を利用した自然観察の学習です。教科書などで得た動植物の知識が、実際に見たり触れたりすることでリアリティを持って理解されます。そして、この学習を通じてただ自然について詳しくなるだけでなく、友達を思いやる心が芽生えてくるなど予想外の効果も出てきているようです。その他にも、障害者や高齢者とふれあう学習や、留学生との交流、あるいはFMラジオのDJの講演を聴くなど、積極的に地域素材（人材）を活用しているようです。

その中で実際に小学校へ江別の歴史を教えに行った方にお話を聞くことができました。「あらためて資料を整理したり授業に望む心の準備をしたり、色々と大変でしたが、戦争の時には江別で木製の戦闘機を作っていたんだよと話した時、子どもたちが『えーっ、本当？木で飛行機が作れるのー？』と目を輝かせて聞いていたんです。自分が好きで学習していることを人に伝えて喜んでもらえるととても嬉しいですね。」ということでした。非常にすばらしいことだと思います。

●コーディネーター

しかし、今後の展開を考えると不安がないわけではありません。最も心配されるのは「ネタ切れ」です。現在は先生たち独自の情報に頼る部分が大きいようですが、それではいずれ行き詰まってしまうでしょう。そうなれば特定の人材や施設への需要が集中してしまう恐れがあります。それを避けるためには、限られた人材や施設を効率的に調整するコーディネーター（連絡機関）の存在が必要です。そして、江別市においてその役割を担うべき組織として最適なのは、「江別市生涯学習推進協議会」ではないでしょうか。

●協議会の可能性

私たち「江別市生涯学習推進協議会」には教育関係の団体のみならず、芸術文化、スポーツ、ボランティア、市民生活、さらには民間企業まで、様々なジャンルの団体が加入しています。正直なところ、これまでの協議会はこうして分野が多岐にわたっていることで、逆にまとまりを欠いていたような気がします。しかし、「総合学習」をサポートするという活動を考えると、ほとんどの学習要求に応えられるメンバーが揃っていることは大変心強いことだと思います。

「生涯学習」とはその名称ばかりが先行して具体的なイメージが描きにくいものです。私たち協議会でもはっきりとした手ごたえが掴めていません。そんな中動き出した「総合学習」は私たちにとっても大きなチャンスだと思います。もちろん単純にこれがイコール「生涯学習」とはなりませんが、具体的な活動を展開していくことが組織の発展につながり、さらにそれが「生涯学習のまちづくり」にもつながっていくのではないでしょうか。

世代をこえた学習

現在大麻東中学校では、パソコン部の生徒とこの秋IT講習会を受講した高齢者のみなさんが、一緒にパソコンを使って年賀状づくりに取り組んでいます。60近い年の差がありますが、ひとつの目的に向かって和気あいあいと楽しくやっています。今後こうした機会が増えるといいですね。

第1回生涯学習フォーラム

シンポジューム から 9／29(土) 江別市コミュニティーセンター

代を問う

21世紀のキーワードとして「心」の問題が注目を集めるようになって久しくなります。しかし、何度考えても簡単に答えの出せる問題ではないですよね。とにかく正面から取り組むことが肝心と、「第１回生涯学習フォーラム」では８月から９月にかけて、精神科医・幼稚園々長・画家・音楽家・大学教授と５人の専門家のお話を聞いてきました。延べ350人も参加してくれて、慌ててイスを補充した回もあり大盛況のリレー講演でした。誰もが避けて通れないテーマだし、講師陣も個性豊かで魅力的でしたから…納得です！

そして９月29日(土)にはコミセンで獣医の竹田津実さんの基調講演を聞いてから全講師勢ぞろいでパネルディスカッションを開催。どうやって子ども達の心を育むかについて示唆に富む意見がたくさんあったのに、当日は悪天候だったからでしょうか、参加者が80人しか来なかったのはちょっと残念でした。

パネルディスカッションのまとめ

コーディネーター　谷川　幸雄さん

パネルディスカッションの流れを説明しますと、最初に、21世紀を迎え、いまなぜ「こころの時代なのか」について、時代の背景や現状分析、心の考え方などについてそれぞれの立場で述べていただきました。次に、21世紀を担う子どもたちに大人はどう心を伝え育んでいくか、家庭教育では、幼稚園・学校教育・地域社会では、また国・行政の施策としてはなど、具体的な取り組みや方策について述べていただきました。最後に、会場のみなさんからご意見やご質問をいただきました。話しの内容を一部紹介しますと、戦後50有余年すぎて、我々大人が忘れてきたものは何であったろうか。それは「心の教育」ではなかったであろうか。この点、会場のみなさんと共通認識ができたと思っています。

また、暖かい親子関係の中で思いやりの心、命を大切にする心を育み、遊びを通して強靭な体を育て、協調心、感謝の心などを育てていく。さらには自然を愛する心、共感・感動する心、信仰する心などを自然や芸術を通して育んでいくことも大切だというご意見もありました。

21世紀を担うかけがいのない子どもたち一人ひとりに大人は強い関心と深い愛情をもってみんなで心をあわせ、知恵を出し合い、そして力を結集して「豊かな心を持った人間の育成」に努めましょう。みなさんのますますのご健勝をお祈り申し上げますというコーディネーターのことばで終わりを告げました。

○レる社会の親子関係

パネリスト　渡部　正行さん

いま高校生でケータイを持たない子は皆無に等しい状態ですが、「満足しているか?」との問いに９％がＹＥＳ、91％がＮＯでした。別な調査での反応。将来は？「父親のようになりたくない。母親のようにも。」日本を除く各国では「父、母」と答える同世代が最も多いそうです。私が腹が立つのは「思春期は傷ついている。だからこれをワカラナイ大人が問題である…。」こんな私と同業者の心理や精神病理の専門家の意見です。連日家庭内の悲劇が報じられますが息子が親を殴るという状況はコワれているとされるアメリカでさえ稀です。いじめ・不登校・引きこもり…すべてに潜む共通の病理。それは目をつぶることなく共に悩み解明すべき社会の病理なのです。

遊びで育てる心とからだ

パネリスト　安藤　陽子さん

子どもの成長の過程には多様な触覚の体験が必要です。子どもの内なる世界は肌を通じて感じた時に深く感応、全ての感覚が育っていきます。十年前、入園児のなかにオムツをする子、コミュニケーションが全くとれない子などが急に増えました。それからの取り組みでいろんな試行錯誤を繰り返し結論として人間の最も深いところを耕すには大人が子どもとしっかり寄り添っていかなければならないと痛感しました。また園で山羊や羊を三代にわたって飼いました。毛をつむぎ糞は畑に還元。園児たちと共に動物を育てていたわる中で峻厳な〝生と死〟を学びました。幼児期の基本的な体験は貴重です。子どもの内なる世界を伸びやかな遊びで育てあげたいものです。

声 フォーラムから得たもの

横山　真さん（園町）

今回、第一線で活躍されておられる方々のお話に感動し聞かせていただきました。平均寿命が50歳から80歳に延びたのも事実ですし、豊かな社会しか知らない世代の方が多いという現実の中で、古い枠組みのまま何もかも評価してしまっている中に自分がいることを反省したのです。確かに社会は大きく変わろうとしていますが、教育改革では「こころの教育」「生きる力」を重点に掲げ、多様な学習形態を模索できるものになっていたはずですが、宗教性や芸術を重視した自分を見つめ直し掘り下げる教育は期待できるのでしょうか。そのようなおり、幼稚園での遊びの中に小動物や自然を通しての「いのち」とのふれあいや開かれた家庭生活への具体的提案は、各学校や家庭でも是非取り上げ関心をもっていただきたいものと思いました。

本望　由佳さん（厚別区）

生涯学習フォーラムに参加させて頂きありがとうございました。

渡部正行先生のお話の中で自分では、父親が仕事から帰宅後に子どもの面倒をみるのは、当たり前だと思っていたのですが「父親が

こころの日

基調講演

竹田津　実さん

テーマ
「動物の心、人の心」

「心」の問題についてですが、私は獣医ですからこのことを生物学的に考えていきたいと思います。子どものころは感性で動物と話ができるんです。でもそのうち、話ができなくなるんです。これはなぜでしょうか？私のところに野生動物を持ってくるのはどんな人だろうと統計を取ってみると、何とみごとなことに小学4年生までと65歳以上の人であることに気がつきました。不思議とこの中間の世代は野生動物の治療を依頼してこないんです。

この話をある席で話すと「そうだ！」という人がいました。その方に聞いてみますと、絵の世界も同じで感性豊かな絵を描けるのもこの年代なんだそうです。これはなぜか？小学4年生くらいまでは社会の体制に組み込まれていないが、それを過ぎると、受験という社会に組み込まれてしまっている。一方、65歳以上になると誰も社会から期待されなくなる。つまり、社会の体制にどっぷりとつかってしまうと動物本来が持っている感性が感じられなくなってしまうということなんです。

最近O157などによる感染が時々問題になりますが、O157は大腸菌の一種できれいなところで発生するんです。大腸菌は身の回りのどこにでもある細菌ですが、雑多な細菌が多くあるところではO157は生息できないんです。私たちの生活環境がどんどん近代化していく過程で身の回りをきれいに清潔にしようとしてきました。どんどん鬱陶しいものを排除しようという方向に進んでいます。昔は家庭の中に「死」というものがありましたが現在は核家族化が進み、「死」に触れる機会がほとんどなくなりました。現在は、鬱陶しいものを排除しようとして本来必要なものまでも失ってしまっているんです。

子育てで、子どもを大きくすることは簡単ですが、大人にすることはむずかしい。子どもは親の行動のまねをすることで育つんです。現在のテレビなどで何でも情報が入る時代では身近に憧れるものがなくなってきていることは不幸です。かつては、各家庭に家風があったが憧れるべき家風がなくなった今は不幸だと思います。

人は有名なものを残したがるが、有名なものが残るにはそれ以外にも膨大な無名なものがあります。人間社会も同じで、有名なものだけが存在しているのではなくて無名な多くの人々がそれを支えていることを理解していただきたい。

生きることと芸術表現

パネリスト　伏木田光夫さん

私にとって原体験的な思い出となるのは日高の浦河海岸での幼年期です。昆布浜に打ち寄せる冷たい波と戯れたヤンチャ時代。自然は芸術と人間を結びつけ蘇生させるパイプであると教えられました。60年代中頃からアメリカに現れ世界的に影響を及ぼしたヒッピーは既成の社会体制・文化・習慣などから抜け出して好むがままに生きようとしましたが、彼らも自然と人間の一体感を強く志向しました。絵を描き音楽を求めるというのも本来、人が持つ蘇生力を引き出すことです。自然という母体があり崩壊しようとする個人や家庭が立ち直ることができます。生活に芸術を持つ家庭に〝おちこぼれ〟はあり得ません。自然の持つこころの治癒力に注目したいものです。

精霊たちと音楽

パネリスト　三上　敏視さん

物の時代から心の時代へと言われますが、現代人は物にも心があるとは考え得ません。でも今でも針供養や包丁楽などという伝統行事がありますね。古来、私たちの祖先は物にも心があると信じていました。アニミズム（精霊信仰）の世界では〝音〟で人と精霊と自然界を結び、「生きる力」を継承して来たのです。世界中の民族はそれぞれの伝統文化を持っていますが日本と韓国を比べると韓国では世代を越えて誇り高く受け継がれて行くのに驚きます。日本の中学音楽に来年度からようやく邦楽が取り入れられると聞き韓国の音楽家が驚いていました。民族としての音楽を養うことは国際的な人づくりにも役立ちます。家庭に社会に音楽の〝自給自足〟を提唱します。

子育てに参加するとは、そういう意味ではない。」と言われ、自分の間違いに気付き、その後家の中はとても明るくなりました。

また、私の中にも「自分は悪くない、世間が悪い」という考えをもっていたのが恥ずかしくなりました。

今回、子ども連れの参加で終了するまで毎週大変でしたが、母の協力があり家族で話し合える機会もできて良かったです。

黒田　祐一さん（大麻）

〝心の教育〟に〝こころのケア〟、〝共感〟、〝受容〟…。実体なき言葉が先行する大人のパフォーマンスの裏に潜む欺瞞の臭い、それを鋭敏で純粋な感性を持つ子どもが見透かせないはずがない。世間に巻かれ取り繕うことに慣れ切った大人に、子どもの声を聞くアンテナが、果してあるのだろうか。錆ついてはいないだろうか。

こころをテーマとする際、分野を問わずその焦点化の対象は子どもに傾く。私は自らに問いたい。今ここで何を感じ、何を思い、それをどう表現しているのか。フォーラムに参加するにあたって、求めたものは何もなく、よって得たものもない。本来、主体としての学びの場に、聴き手・話し手の差はなく、ただその空間に、小さな感性の共鳴があると信じるからだ。ありがとうございました。

旧市街地の一角にある赤レンガの建物は、大正11年に私設郵便局として誕生しました。その後病院、学習塾と姿を変え、一時は解体の危機に直面したものの、今年９月から音楽好きの集まる「ライブバーJAZZハウス」として、生まれ変わりました。

レンガ造り３重構造の内部は、防音・音響の面に優れ、プロプレイヤーの練習やライブの会場としても利用されています。現在は毎週金曜日にJAZZのライブをしていて、今後は他の曜日も演歌やエレキの日としていろいろなジャンルの音楽好きが楽しめる機会を増やしていく予定です。

また、20人収容可能な店舗内と80人収容可能なスタジオは、日頃の練習の成果を発表する場所としてアマチュアの人にも使用させてくれるそうなので、利用方法・料金などまずは相談されてみてはいかがでしょうか。(あまりウルサイ演奏はダメみたいですけど)

プロドラマーのオーナーとピアニストのきれいなお姉さんがいるJAZZハウスは、

２条２丁目　JR江別駅から徒歩２分
☎011－382－8491
OPEN　午後７時～午前１時
日曜祝日休み

マイ・ブーム

「ペイ・フォワード 可能の王国」

（原題　Pay It Forward）

森　陵一さん

巨額の制作費をかけた娯楽大作映画を観るのもいいが、たまにはこんな渋い作品を観てみるのはいかがだろうか。

ラスベガスにある中学校。社会科教師シモネット先生は、1年生の最初の授業で生徒たちに〝世界を変えるにはどうしたらいいかを考え、それを実践しなさい〟という課題を出します。

そこで生徒たちはそれぞれにいろいろなアイディアを考え、発表します。主人公トレバーが考えついたのは、〝自分の受けた親切を３人の別の人に渡していく〟というアイディアでした。一見単純な子どもの発想ですがこの小さな運動が次第に人々を、そして本当に世界を変えていく可能性が見えてきます。

一流スタッフ&キャストが結集して完成させたこの作品で語られるのは、〝何についても考えてみる〟ことの大切さと、〝子どもと大人と社会の関係〟。

そこからは、少年犯罪が増加する先進国社会の抱える病と、人と人との心のつながりの大切さが浮き彫りにされます。

この映画は善意を信じることを前提にストーリーが展開していきます。今、アメリカの同時テロ事件を発端に世界同時不況・不安の兆しが出てまいりました。景気の悪い状況が長く続いたこともあり人々の心が段々すさんで来ているように思います。人が人を信じられなくなってきている今こそ、善意に見返りを求めず次の人に渡していくという発想は大変新鮮にそしてすばらしく思えます。

どうか映画の話としてではなく、皆さんも実践されてはいかがでしょうか。

ホームページになりますよ

近日公開

平成11年産のガイドブックNo.4には、生涯学習の団体や指導者の情報がたくさん詰まってました。だけど、2年も経つと連絡先は変わってるわ、もう活動はしてないわ、情報が傷みまくってます。なのにこの種の情報を求める人が一番多いんです。困った…。

もうこうなったらホームページしかないかな？

てなわけで江別市のホームページに入れちゃいました。これなら情報が変わればすぐに直せるし、「うちも載せて」の声にもすぐさま応えられるはず。現在急ピッチで作業を進行中ですが、中には「ホームページって何ですか？」というご質問もあり、そんな時は貧困なボキャブラリーを総動員して分かりやすく（？）ご説明しています。

とにかくスタートすれば問題も出てくるでしょうし、本と違って発行して「はい、できた。終了。」というわけにはいきません。やりっぱなしにはできないんです。でも、方向性は間違ってないんじゃないかなと思います。あとはみなさんの協力も絶対必要です。内容に変更があったらすぐに連絡してください。

あっ、公開はもうちょっと待ってください。スイマセン。

ホームページ
http://www.city.ebetsu.hokkaido.jp/
Eメール
kyouikubu@mta.biglobe.ne.jp
☎　011－381－1062
FAX　011－382－3434
窓口
教育委員会生涯学習課事業推進係

編集後記

▼天も地も広き江別にペダル踏む

過日地球5万キロを自転車で走破するイタリア人写真家ルチアーノ・レブリさんと交流を深め自転車ならではの自然と人との出会いのすばらしさを教えられました。自転車でのふるさと江別再発見をお奨めします。生涯青春の意気が横溢すること必定。（柳原）

▼今年も庭木を囲う季節になりました。この時期になるといつも亡き父を思い出します。手伝う私に、縄のかけ方や鉢上げはこうしてするのだと根締めをしながら教えてくれた笑顔…。あの頃の父の年齢に近づいている自分に気づくとともに、来春の花を楽しみにしているこの頃です。（高野）